

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月28日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730387

研究課題名（和文） 機能主義的社会システム理論の提言論的応用に向けた基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Research for Practical Applications of Functionalistic Social Systems Theories

研究代表者

三谷 武司 (MITANI TAKESHI)

新潟大学・人文社会・教育科学系・特任助教

研究者番号：40452065

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会学的研究の社会に対する貢献のあるべき姿を理論的に捉えるための基本図式を、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの機能主義的社会システム理論の、とりわけ従来軽視されてきたその規範論的側面を解明することによって、構築することを目的としている。具体的な成果としては、特に初期の著書『行政学の理論』の検討を通じて、規範的研究と経験的研究の架橋という問題設定を見出し、その意義を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to construct a basic scheme for theoretical understanding of the ideal contributions which sociology should make to its object: societies, by clarifying the long neglected normative-theoretic aspect of functionalistic social systems theory of German sociologist Niklas Luhmann. As a result, this study found out that especially his early works such as *Theorie der Verwaltungswissenschaft* (Theory of Public Administration) contains an important problem-setting of the “bridging between normative and empirical studies,” and that this is consistently meaningful starting-point for Luhmann’s later works.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：社会学、理論社会学、社会システム、機能主義、ルーマン

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、科学研究の成果の社会への還元が強く求められている。社会学もまたその例外ではなく、実際、社会学という大きな括りに含まれる個々の研究においては、それぞれの研究者が具体的な社会貢献の意図を持っていることも多く、現実に社会学的研究が社会貢献をなしている面も、個別には認められる。

(2) しかし、社会学的研究の成果と、それが社会に対してなす貢献とのあいだの関係というのは、それ自身が社会学的研究の対象となりうる現象であるにもかかわらず、そこには社会学理論による一般的な概念化が欠けている。社会学的研究の知見によって、対象である社会に対して、いかなる意味で「良い」結果が生じるのかについての、理論的な検討が不足しているからである。

(3) 他方、ルーマン研究もまた、一種の袋小路に迷い込んでいる。とりわけ日本において、著書の多くが翻訳され、その概念体系や議論内容の紹介・解説が進んでいるにもかかわらず、ルーマン社会学の社会学理論一般に対する、さらには対象たる社会に対する意義についての理解が深まりを見せていない。

(4) これには、ルーマン研究における対象設定のバイアスが原因として挙げられる。すなわち、40年に及ぶ彼の学問的キャリアのうち、後期 具体的には、80年代以降のオートポイエーシス理論導入後の時期 を完成態とみなし、そこで示された概念図式の紹介・解説に、これまでのルーマン研究は偏っていた。この態度においては、60年代の初期ルーマンは、たとえばいまだパーソンズ理論などの影響下から抜け出せていないといった、消極的な捉え方しかなされなかった。

(5) 研究代表者は、この傾向とは反対に、主として初期ルーマンの研究を行ってきた。その結果、初期ルーマンに見られる特徴的な議論 たとえば方法論としての等価機能分析や、評価概念としてのシステム合理性 は、後期を完成態とみなすアプローチではうまく位置づけられないこと、むしろ、これらの概念や方法論を駆使する初期ルーマンを核とするアプローチによって、後期ルーマンをも包摂するような統一的解釈を示ことができる可能性があること、を明らかにしてきた。

## 2. 研究の目的

(1) 初期ルーマンが用いる独自の方法論としての等価機能分析、独自のシステム概念の基づく評価概念としてのシステム合理性など、狭い意味での経験主義的社会学理論の枠内には収まらない側面に着目し、これらを統一的に包摂するルーマン社会学の基本的なパースペクティブを描き出す。

(2) 研究代表者によるこれまでの研究から、このパースペクティブは 従来主流のルーマン解釈とは異なり 規範論的・提言論的傾向の強いものだとして予想されるので、その別出・特徴把握を通じて、現在社会学的研究に欠けている、社会学の社会に対する提言的役割の理論社会的把握という問題設定をより明確化し、その解決の可能性を模索するための基礎を構築する。

## 3. 研究の方法

(1) ルーマンは多産であり、研究を開始し

てから最初の10年間(ほぼ1960年代と重なる)が著書が10数冊、論文が40本程度ありそれだけで1つの学説研究の対象となる。そこで、この時期の議論の展開を詳細に追っていくことによって、どのような発想が初発にあり、そこにいかなる源泉から知的影響を受け、また独自に概念構築をして、1つの理論としてのルーマン社会学ができてくるのかを、学説発展史の解明という形で分析的に明らかにしていく。

(2) この作業を通じて、初期ルーマン学説の全体像が、基幹的な問題意識の部分と、その解決のために様々な源泉から採用した暫定的な議論とに明確に分類された形で、浮かび上がってくる。これをもとにして、さらに1970年代以降の中期・後期のルーマンの議論をどこまで包摂的に理解することができるか、どこから先はできないか、どこかに基本的な問題設定の変更があったのか否か、を明らかにする。

(3) ルーマンの社会学的なアプローチでの提言論が、より露骨な形で規範的議論を展開する隣接諸分野(倫理学や法哲学など)と比して、どのような特徴をもつものであるのか、どのようなメリット/デメリットをもつものであるのかを、比較によって明らかにする。

#### 4. 研究成果

(1) 1960年代のルーマンの学説展開を詳細に跡付けていく作業の中で、1966年に刊行された著書『行政学の理論』(Theorie der Verwaltungswissenschaft)が、これまでの研究ではほとんど言及されることがなかったにもかかわらず、理論構築上の問題意識を

きわめて明確に示したうえで、機能主義方法論とシステム理論を車の両輪として採用することの意義を論じているという意味で、最重要著作であることを発見した。

(2) とりわけ、『行政学の理論』では、ルーマン自らが、社会学理論構築の目標を、「規範的研究と経験的研究の分断状況の克服」として設定しており、研究代表者のこれまでの研究に基づく、ルーマン社会学の基幹には規範論的・提言論的発想があるという仮説が、ひとまずルーマンその人の言葉によって裏付けられることになった。この文言自体は、よく読まれている『目的概念とシステム合理性』の最終章に出てくることで知られていたが、この問題設定を正面から論じた著作はこの著書が唯一であると言える。

(3) さらに、この著書においては、その「分断状況」がいかなる意味で問題であるのか、機能主義的システム理論がそれをいかなる意味で解決できるのかについての議論が、ある程度詳細に論じられている。しかしそこでは、問題についても解決についてもかなり独自の捉え方がされており、それゆえ研究代表者は、本研究の計画を、この問題/解決についてのルーマン独自の発想を、ルーマンの議論展開の内在的な発展と、1960年代当時に至るドイツの知的文脈の双方から検討していくことを最優先するものへと方向修正した。

(4) そのうえで、ルーマンが採用した機能主義的システム理論は、対象(システム)の存立を、本来解決不可能な問題を解決可能な(しかし非本来的な)モデル問題へと変換するという機能から積極的に捉え、法学や経済学のような、対象システムの存立に依存して成立する規範的研究分野を、モデル問題の解

決を用意するための「決定工学」として捉えるが、しかしシステム理論自身はそこから距離をとる、という形で経験的／規範的の二つの研究領域を架橋するという構想であることを明らかにした。

(5) しかし、その構想の内部論理は非常に独特かつ複雑で、完全に把握しきれたとは言えない。そこで、特にこの著書で直接の対決対象となっているドイツ行政学の伝統を参照しつつ、ルーマンの発想の独自性をさらに解明するとともに、ルーマンが個別の対象に対して行った様々な研究を、本研究が明らかにした上記の観点から捉え直すという迂回路を経たうえで、本研究の当初の目的に戻る。

## 5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

三谷武司、初期ルーマンにおける「経験的研究と規範的研究の架橋」、日本社会学会、2010年11月7日、名古屋大学東山キャンパス

[図書](計1件)

三谷武司、他(盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾(編))、東京大学出版会、『公共社会学 公共性とリスク』、2012年(印刷中) 272

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

三谷 武司(MITANI TAKESHI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・特任助教

研究者番号：40452065

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし